

寺田縄日枝神社の例大祭に並べられた「大人神輿」と「子供神輿」



両基ともに地元の方々による手造りの神輿です。完成度が高く、地元の誇りとして例大祭には町内を渡御（担ぎまわる）します。

大人神輿は、山王会（神輿の保存に努める寺田縄の方々）のメンバーと平塚市内の友好団体に担われます。子供神輿は寺田縄の子供会のメンバーにより、役員さん達の手を借り、町内を巡行します。

渡御前に二基が並び立つ姿は、実に壮観です。



出御の儀式が終え、山王会会長が打つ拍子木を合図に神輿は町内へ、還御は夕刻、境内に集まった地元住民に歓喜をもって迎えます。



町内を渡御する大人神輿

手作りの神輿は、注目され、新聞記事として報道されました。



<記事文言>

平塚市寺田縄地区の祭り好きの住民で作っている太鼓連 石塚博会長（39）の会員たちが、6年間かけて大みこしを作り上げ、12日に行われる地区内にある日枝神社祭礼で披露する。みこしはとても手作りと思われないほど立派なもので、会員たちは、「住民ぐるみでみこしをかつぎ、祭りを盛り上げたい」と張り切っている。

日枝神社は、地区の鎮守 毎年4月に祭礼があり、若者たちが神社に奉納したみこしをかついだ、ところがみこしは制作されてから120年ほどたち、みこし全体が老朽化、かつぐには危険になった。新しく制作するとなると1000万円以上もかかることから、さる57年5月、太鼓連の会員たちが、自分たちでみこしを作ることにした。

参加したのは会社員の石塚会長をはじめ、鉄工場、工務店経営、農業、公務員、自動車整備士ら12、3人、毎週日曜日に制作場所を提供してくれた会員の家に集まり、現在あるみこしをモデルに設計、手分けして作った。

材料のケヤキ材や金属板などは、住民からの寄付や自分たちが持ち寄り、やっとの思いで完成した。みこし本体の重さは約400キロの見事なもので、本体は黒、朱色に塗られた。かかった費用は材料の一部のわずか30万円ほど、12日は神社に奉納したあと、地区内を担ぎ歩きます。

（昭和62年4月7日火曜日 読売新聞 地方版）

2012（平成24）年11月 『寺田縄日枝神社神輿 その歴史と神輿新造の思い出』と題して「金田地区地域史研究会 シリーズ 1」として、冊子を発行しました。この年は、神輿新造の25周年に当たり、記念誌として発行いたしました。

前頁の新聞報道時点から、数えて25年のことでした。

本稿はシリーズより、一部抜粋・再編集しています。

地元有志の方々（太鼓連）の篤い思いが結実した、手作りの「日枝神社神輿」を紹介いたします。

● 平成24年（2012）9月9日、寺田縄自治会館で「神輿を語る会」を開催しました。直接神輿造りに携わった方々、山王会、神社総代の方々にお集まり頂き、新たに神輿を製作した時の苦楽をお話いただきました。

ここにその要点を記し、記録に留めさせていただきます。 （文責：片山）

■ 旧神輿、町内の渡御

まつりの時、旧神輿の担ぎ手が8人くらいで宮出しをした事もあり、とても担ぎきれものではなかった。友好団体の助けは受けなかった。飯島とはつながりがあり、数人の担ぎ手をすけてもらったこともある。

一時は、神輿を車で運んだこともあった。

リヤカーすらなかった時代、農作業の天秤担ぎに慣れていたので、神輿担ぎは苦もなかった。

まつりの日の授業中、宮総代が学校に迎えに来る。寺田縄児童の授業は半日で帰る。寺田縄の連中は喜び、他の者は羨みだった。本当にうれしかった。

旧神輿は、渡御の途中、よく倒した。前身の三之宮比々多神社の神輿は「あばれ神輿」。国府祭では比々多神社神輿以外は荒々しく担がない。その伝統を受け継いでいる旧神輿なので、渡御の時20回ぐらいは倒している。固い地面はやらない。畑、刈り入れ前の麦畑、土手によく倒した。新神輿は倒していない。

「ヨートサッセ」「ヨイトコーリヤサッセ」の掛け声で威勢よく倒した。ぶん投げたこともあった。懐かしく思い出す。

家の垣根に突っ込む、ひっくり返す。でもカラタチの垣根には入らない、槇の垣根には突っ込んだ。カラタチは痛く怪我をする。怪我をしないようにカラタチの垣根はよけた。

毎年垣根を壊された家もあった。

手荒く担ぎ、ひっくり返していたので、蕨手は傷んで凸凹になってしまった。今でも旧神輿にその痕跡が残っている。神輿本体がよく壊れなかったと思う。

担ぎ方は、担ぎ棒の外に首を出すな、棒の中に首を入れろと教えられた。ひっくり返した時怪我をしないようにとのことだった。前方の担ぎ手がひっくり返し、後ろは何が何だかわからなかったが、それにつられてひっくり返した。

まつりは四月、まだ畑には麦が刈られずに残っていたが、お構いなしに担ぎこみ、麦の株に足を取られてひっくり返る。時には、怪我人が出るくらい荒々しく担いだ。

飲みながら、酔いにまかせて担ぎ続けた。夕方になり、サイトーミートからお宮への距離が長かった。酔っぱらって、へべれけ、宮入は何時になるか分からなかった。それくらい氣勢が上がっていた。

寺田縄の神輿は、比々多神社の伝統をいかに発揮し担ぎ通した。

旧の子供神輿は総ブリキ製。細部までブリキでできていた。渡御の時、担ぐのがうれしくて、張り切り、大人神輿の前に出ようものなら、大目玉だった。

修理には、炭火で半田ごてを温め、作業し、豊田の加治屋に出したりした。ブリキ製でも、子供には重い神輿だと感じていた。

■ 神輿を新たに造る

新神輿を造るようになったのは、あちこちで神輿担ぎが盛んになり、寺田縄の歴史ある神輿は、担ぎ続けると壊れそうになるくらい傷んでいた。個人的には新しいものを作りたかったし、他の人にもそのことを話したりしていた。

旧神輿を修理するということは考えられなかった。あっちをいじればこっちが悪くなる。やり方によってはバラバラになる。そんな状態の神輿だった。

我々が神輿を造るとか、小泉さん（大工さん・故人）の神輿造りを手伝うとかは考えていなかったが、小泉さんから「神輿造りをしているから見に来」と言われ、出かけてみると、すでに台座ができ、取り付ける「井垣」の穴が掘られていた。

神輿造りは小泉さんが一人で始めたことで、皆が作ろうと決めて始めたのではなかった。ましてや、素人の我々が神輿を造れるなどと思ってもみなかった。

神輿造りは小泉さんに声をかけられて始まった。

今から27、8年前のまつり時、小泉さんは「この神輿を造って死にたい。死ぬまでに造りたい」と言っていたことを思い出す。

神輿新造にあたって、旧神輿を中島和久さんの工業所で分解し、屋根と胴体が離れること。ボルトが傷み、しっかり止めないと屋根が回ってしまうぐらいの損傷であったこと。屋根は4本の柱で支えられ神輿には真柱が取り付けられていなかったこと。など、神輿の大まかな構造と損傷が判明した。百年以上の永い間担がれてきたため、確かに釘穴が大きくなり、ボルトや木口も傷んだ状態だった。

真柱はなかったが、「御霊」のための柱は据えられていた。

構造を知り、小泉さんは、「これなら手造りでできると思った」と考えられる。

■ 彫刻の担当

小泉さんを助け、井垣を作ったが、数が多く終わりが知れず、嫌になったこともあった。でも、小泉さんに教わり、励まされたりしながら彫り進めた。

彫り物にはケヤキ材を使ったが、彫刻された部材を埋め込むのに、ケヤキの特性で時間がたつと変形し掘り穴に埋め込めない事もあった。小泉さんから「彫もの」を削っても良いかなど、聞かれたりしながら組み立てを進めた。

ケヤキの部材は購入せずに、個人の家からの部材を流用し活用した。

小泉さんから色々な仕事が指示された。榊組は、数も多く一人当たり何個と割り当てられ、材料と道具が渡されて彫った。400個ぐらいの数だったと思う。形を揃えるのにすごく苦労した。

作業の道具は個人持ち、彫り進めるうちに道具も高価な使いやすい物へと変わり、本職の使う道具を手に入れ使った。使い、何度か砥ぐうちに、歯の部分が小さくなったり、木部も使いやすいように削り込んだりした。絶えず、手には豆ができた。

土・日も休むことなく彫りものを続けていた。

■ 彫金の担当

鳳凰作りを担当したが、仕事から、簡単にできた。彫金は素人がやるには難しいが、金属は木材と違って補正がきく。失敗しても直せる。

初めに、注文で、蕨手の上を飾る「ツバメ」を作ったが、本来は「鳳凰の子供」を作らなければならなかった。通称でツバメの注文で作ったが、鳳凰ではなくツバメを作ったので、再度、鳳凰の子供として作り直した。

鳳凰は、羽を大きく、しかも動くようにとの注文だった。簡単に作れると思ったが、そのままだと動かせば羽は折れてしまう。そこで、蝶つかいで羽と胴体をつなぐ。つなぎ手の上下に強さの違うバネを取り付ける。これにより、羽がふわふわと動くよう

に表現できた。

首は、旧神輿の首を石膏で型を取り、中島鉄工所で真鍮を流し込み、作り上げた。注文は続き、首を持ち上げろ、足を曲げろ 等々・・・。

完成した鳳凰は重たく、工作した山岸さん宅から作業場の本田さん宅まで、休み休み運び、屋根に取り付けるのに、二人掛りだった。

軽量にするため、会社で胴の内部のくりぬきをしたが、事情を話すと二つ返事で職人達が手伝ってくれた。

屋根の「巴紋」を形作るのに、初めは真鍮の板から叩き出していたが、山岸さんから「なめす」ことを教わり、バーナーで熱してから叩き出すと容易に、しかもきれいに仕上がった。しかし、冷えるとまた工夫が求められた。

素人が、先輩・経験者から話を聞きながら作業したのがよかった。

家の近くの者が作業すると、その音が聞こえてきて、彼の張り切りが、励みになり負けじと作業に力を込めた。

■ 写真の担当

細かな部分は、旧神輿を観察しながら製作するので、その都度、作業場と神社を行き来するわけにはいかず、また、図面もなく、寸法を測ることもなかった。現物に近づけるため、旧神輿の写真を撮り、原寸大に引き伸ばし、部材をあてがいながら彫り、切り、打ち出しをしながら完成させた。

作業で、分担の写真係が完了し、他の人の作業を手伝いたくても手出しできなかった。それ程、各部分の製作が専門化され、途中から割り込んで手伝うことはできなかった。

■ 神輿全般

新神輿は少し小さめに作ってある。一寸でも詰めるとこれが難しくなる。欄間の鶴は、彫られた板を当てはめると狭い部分に組み込むために、鶴の尾が少し切れている。

唐戸は正面と真後ろのみが開閉する。旧神輿は四方の戸が開いたが、担ぎながら開閉してしまうので、二面だけが開くように作り変えた。

旧神輿は真柱がなかったが、新神輿は胴の中心に化粧柱を立てている。この柱が傷むと屋根を支えられなくなってしまう。

輿棒の太さは、材料の関係で、箱台輪付近より先端部は細くなっていた。太さを合わせるためにパテ仕立てだった。そのことを含めて、輿棒はよく折れなかったと思う。渡御に出て、鳥居をくぐるまで心配だった。

新神輿は、輿棒の間隔が旧神輿より狭い、部材の関係もあったが、狭めてある。

素人の我々が神輿造りに挑戦し、未経験であった作業の行程や、作業技術を教わった。実にいい体験だった。

■ 神輿の重量、製作の経費と最終作業

新聞報道にある「みこし本体の重さは約400キロ」、「費用は材料費の一部のわずか30万円ほど」について

旧神輿は400kg程度との話は聞いたことがあった。新神輿の重量は計っていない。地元でも測る手立てはあったが、そこまではしていない。大きさを測って作業などしていない。神輿は神社であって、御霊が納まるもの、計測外のことだ。

でも相当に重いことは確かだ。それも担ぎ方にもよるが、例えば女性が加わると重く感じるし、背の高い者は重く感じる。重さの感じは人それぞれだ。

モジリがたいそう重い。雨になれば水を吸い込んで、重量が増す。

新神輿を作る経費は、寺田縄の団体や一般からの寄付、等が主なものだった。まとまった支出は、東京で購入した飾り金具代金だった。

「年末ジャンボ宝くじを購入してください」というお願いが会員宛に出された。「製作には150～300万円といわれ、資金が窮地に立たされている。つきましては、年末ジャンボ宝くじを購入し、当たったら製作資金に寄付してほしい」とのお願いだった。購入の目標は300枚。実際に購入したが目論みは外れてしまった。一人2万円の宝くじ券の購入が勧められた。

材料代、道具代、費やされた労賃、等々を勘案すると、新神輿の総費用の算出は難しく、当然のこと30万円ではできず、道具代を含め、製作者の自己負担、ボランティアだった。

製作の最終の追い込み作業として、7月から毎週日曜日、当番制で作業の割り振りを決め集中的に制作にあたった。ほぼ強制的に、一人当たり、月、二回作業を行った。作業場所は今でも残っている本田さんの勉強部屋だった。完成後の神輿は本田宅から日枝神社に向かった。

■ 神輿の掛け声

掛け声は「ヨートサッセ」から「ドッコイ」に代わっていった。旧神輿は「ヨートサッセ」。新神輿が「ドッコイ」。若い時分は「ヨートサッセ」だった。いつごろ変わったのか？

「ドッコイ」は湘南海岸から小田原方面に伝わった。

甚句が入ると「ヨートサッセ」では調子がとりにくい。「ドッコイ」がよく合う。

(参考・平塚市博物館平成17年度夏期特別展図録)「ドッコイ」という掛け声は、昭和50年以降、各地に神輿保存会が結成され、他地域との交流が活発になると、いっぺんに「ドッコイ」担ぎへ変わっていった。

■ 子供神輿

大工の小泉喜太郎(故人)さんが作り、個人的に奉納した。製作の過程で、欄間の彫り物は二宮孝さんが手伝い、鳳凰は浅草で購入し、他は小泉さん一人で作り上げた。

■ 終わりに

新神輿の完成後、日枝神社へ寄贈する件で、宮総代と神輿のつくり手(太鼓連)とのいろいろ行き違いがあったが、治まり、無事、円満に解決し寄贈のはこびとなった。

旧神輿は「社宝」として日枝神社拜殿に安置され、今日、町内を渡御する神輿は、寺田縄の地元でてしおにかけて製作された神輿です。

<参考文献>

手中 正「神輿と明王太郎」東京美術(1996)

平塚市博物館「平塚の祭り・平成17年夏期特別展図録」(2005)

日枝神社宮総代「寺田縄日枝神社の歴史」(1998)

平塚市教委「平塚市文化財調査報告書第34集」(2003)

寺田縄山王會「太鼓連から山王會」(2010)

神崎彰利他「神奈川県史」山川出版社(1996)